

おうみネット

〔特集〕

「移住してみたいですか?Ⅱ」

「ソフトな移住を考えてみよう」

上平寺御城下の宿「うむ」オーナー
インタビュー:川村千恵さん

J's style dining主宰
インタビュー:篠田仁美さん

▶ご紹介はP2

Contents

〔特集〕「移住してみたいですか?Ⅱ」	P2~4
人と地域とつながる事業所さん	P5
企業の社会貢献活動 わたしたちのサボ活!	P5
市民活動レポート	P6~7
おうみ未来塾リレーエッセイ	P7
応援インフォメーション	P8



Ohmi Network Center

淡海ネットワークセンター

公益財団法人 淡海文化振興財団



特集

未来に - 向かって - つなげる - つづける

「移住してみたいですか？Ⅱ」

～ソフトな移住を考えてみよう～

昨今の移住ブーム。ネットや紙面でも取り上げられていますが、おうみネットも前号に引き続き、「移住」をテーマにお届けします。前号では実際に移住し、そこでの仕事や生き方をお聞きし、リアルな移住者の声をお届けしましたが、今号では移住者のサポートに長年携わってこられた方からみた「移住」を取り上げました。そこから見える現状や問題点、そして2拠点でのライフスタイルを実践されている新しい移住の提案をご紹介します。

上平寺御城下の宿「うむ」オーナー
川村千恵さん インタビュー



京極氏館と庭園を案内

川村千恵さんは、長浜・米原地域で長年、空き家サポートに携わり、移住者や受け入れ側のサポートを続けてこられました。昨年からは、ゲストハウスをオープンされ、今までと違うサポートと地元の情報発信に力を入れておられます。そんな川村さんに移住の状況、そこから見てくるこれからの移住について、お話をうかがいました。

最近の移住の傾向は…

●最近では移住ブームとも言われていますが、長年、サポート側として関わってこられた川村さんにも実感はありますか。また、移住のきっかけは変化してきているのでしょうか。

川村さん 私が見てきた米原・長浜地域でみると、相談にこられる人も実際に移住してこられる人も増えていますね。た

だ、新型コロナによって移住が増えたという実感はあまりありません。以前からもそうですが、「自然の中で子育てをしたい」というきっかけの若いファミリー層が多いですね。

●受け入れ側、例えば行政や地域の変化はありますか。

川村さん 以前は「とにかく人口を増やしたい」という漠然とした思いが受け入れ側にありましたが、地域によっては、例えばファミリー層に来てほしいとか、起業したい人に来てほしいとか、ターゲットを絞るようになりましたね。そのために、「こんな空き家を用意しています」など具体的に変わっています。

ソフトな移住もいいんじゃないかな

●移住の相談を受けて感じることは？

川村さん そうですね。なぜか田舎で暮らすとお金がかからない、という意識の方が多いような気がします。そして、テレビの影響が素敵な田舎暮らしがすぐにもできるとっておられる。しかし空き家だって改修しなければ住めないし、車も必需品だし、案外経費がかかることに驚かれますね。

お金の問題もですが、もう少し人生設計というか、子どもの進学など、少し先まで想像して移住を考えていただくことをお勧めします。

●なるほど。反対にそういったことを含めて、「定住」が移住のハードルを高くしている可能性もあると思います。いま「関係人口」*という言葉もあるように、いくつか拠点をもち、地域と関わりながら生活するパターンもありますが、どう思われますか。

*「関係人口」

移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々を指す言葉。(総務省ポータルサイトより)

川村さん ソフトな移住というか、そんな形が増えればいいと思います。そういう事例が増えれば地域もどう付き合っていけばいいかわかるし、地域がそういった移住の形に慣れると垣根が外れていきますからね。

ただ、そこに拠点を持つからには、その地域の人以上に地域と関わる気持ちが必要ですね。その覚悟がなければ地域とうまくいかないし、寂しいじゃないですか。関わらないなんて。せっかくそこが好きで住むんですからね。

最後に…

●そうですね。それでは川村さんの思われる移住がうまくいくポイントはどこでしょう。

川村さん うまくいく、いかない、どちらも人との関係だと思っています。

特に米原や長浜で考えると人付き合いは濃厚になります。このお付き合いを面倒だと考えればうまくいかないし、うまくいっている人は長続きしていますね。

移住者、受け入れ側、お互いが「適度な距離感を持つ」ことが大事で、それを教えてくれるのも人です。仕事も、子育ても、いかに地元の情報を提供してくれる人に出会えるかどうか。これが大きなポイントだと思います。

Profile

インタビュー：川村千恵さん

上平寺御城下の宿「うむ」オーナー

NPO団体「いざない湖北定住センター」で空き家バンクの運営のほか、空き家所有者からの相談対応や田舎暮らし希望者のサポートに従事。2019年に米原市上平寺の空き家を購入、リフォームし、昨年の夏にゲストハウスを開業。現在も、いざない湖北や米原市の「空き家対策研究会」の活動に関わっている。

川村さんのいう「ソフトな移住」。複数の拠点をもち、地域とも関わりを深める暮らし。そんな「ソフトな移住」を、県内で実践されている方がいます。どんな生活でしょうか。

J's style dining主宰

篠田仁美さん インタビュー

篠田仁美さんは、奥伊吹と大津市に拠点をもちながら地元の食材を使った商品開発や社員食堂のメ



地元の食材でうまれたソース

ニュー作りなどを手がける食のプロデューサー。2つの拠点をもちながらの生活についてお話をうかがいました。

決め手は食の豊かさ

●米原・奥伊吹に拠点を持とうと思われたきっかけを教えてください。

篠田さん 以前、長浜に住んでいて、年に一度、奥伊吹で料理教室の講師として呼んでいただいていた。その時に奥伊吹の食材の豊富さ、水の美しさにいつも感心していたんです。食を仕事にしているので、「ゆくゆくはこんなところに住めたらいいな」と考えていました。

●それから移住を？

篠田さん 料理工房というか、モノ作りができる場所を探していて、そうなればやはり奥伊吹だと思い、空き家バンクに登録し、コロナ禍も重なって移住を決めました。

●大津市にも拠点をもちますが。

篠田さん はい、大津では料理教室をしていました。新型コロナウイルスの感染拡大で活動を休止せざるを得なくなりましたが、そのままにしています。

五感が研ぎ澄まされる奥伊吹

●2つ拠点を持った暮らしということですが、いかがですか。

篠田さん 私にとって、とてもバランスがいいですね。のんびりしたい時はこちら、集中したいときはこちらと、プライベートと仕事のバランスが非常にうまく取れます。

こう話すと、奥伊吹でのんびり、と思われるかもしれませんが、それは逆ですよ。

●逆なんですか。

篠田さん ええ。奥伊吹の方が忙しいですよ！今は雪かきもありますし、買い物だってすぐに行けません。何が必要か十分確認しないといけないし…。人のお付き合いだって奥伊吹の方が密接です！

●人のお付き合いの話がでしたが、地域とのつながりはいかがですか。

篠田さん 毎日、お届け物があります。(取材にうかがった日も玄関にみかんが置いてありました)

温かく受け入れていただいていますよ。だからこそ、地域の活動には積極的に参加するようにして、自分にできることをするように心がけています。

ただ、街のようなお付き合いではないので、正直、戸惑うこともありました。だけど、それも住んでいるから当たり前なことだと思っています。

最後に…

●なるほど。それでは最後に、今後どのようにしていきたいですか。また多拠点をもち生活のポイントなど教えてください。

篠田さん そうですね。この地の豊かな食材をもっと発信していきたいです。本当にたくさんありますから。そして、単なる田舎暮らしではなく、この地の暮らしの良さを知ってもらいたいですね。

2拠点を持つての暮らしのポイントは、「それぞれ暮らし方を変える」ということ。

街の考え、暮らしをそのまま持ってきては暮らせません。地域には地域の考えがあり、暮らしがある。そこを柔軟に受け入れて2つの生活をうまく切り替える。多拠点を持つ生活、楽しいですよお勧めしますね。

Profile

インタビュー：篠田仁美さん

J's style dining主宰

気軽に実践できるテーブルコーディネートとおもてなし料理の提案、地元の食材を使った商品開発やレシピの開発、社員食堂のプロデュースなど
大津市と奥伊吹に拠点をもち幅広く活動中。

ホームページ <https://www.js-style-dining.com/>

前号から続いている「移住」。いかがでしたか。川村さんのお話を聞いて印象的だったのは「そもそも地域と関わるのが面倒と思っている人は移住しないでいいんじゃないかな」という言葉。そこを踏まえて、「移住」というものを考えたとき、前号のお二人、そして今回の川村さん、篠田さんのお話を通して、「移住」はその地域へのリスペクトと愛情が何より大事であるかがわかります。しかし、「定住」のプレッシャーはかなりのもの。そこで篠田さんのように自分で「バランス」を取りながら2拠点で暮らす「ソフトな移住」を取り入れるのもひとつではないでしょうか。

定住であっても多拠点を持つ移住であっても、やはり「移住」とは自分の生き方の体現ではないかと思います。その生き方を地域とともにつくっていきけるといいですね。

さて次号は、また新しいテーマでみなさんとお目にかかりたいと思います。おうみネットならではのテーマで新年度もお届けします。どうぞお楽しみに!

平野馨生里さんインタビュー・後編

岐阜県郡上市石徹白^{いとしろ}に移住し、地域に伝わる農作業着をリデザインして商品化することにより地域文化を発信しておられる「石徹白洋品店」店主の平野馨生里さん。前号に続いてインタビューの後編をお届けします。

現在の石徹白の様子や平野さんの今後の活動についてお聞きしています。

●平野さんが移住された頃と比べると、石徹白への移住者が増えているようですね。

平野さん 2007年に郡上市の取組みとして石徹白地域の将来ビジョンを描く事業が行われ、移住者の受け入れ体制

の仕組み、窓口が明確になったことは大きいと思います。そこから地域おこし協力隊をきっかけに移住、定住される方が多くなりました。移住において「家」の問題は大きい。そこが準備されていると移住しやすくなりますね。

●ほかに何か変化はありましたか。

平野さん そうですね。今年（※2021年）、小学校の生徒数が10名になり、やっと全学年が揃いました。

移住者の子どもたちが半数以上です。集落の人たちは、移住者の子どもたちも同じように見守ってくれているので、より安心して暮らせています。ただ、移住者ばかりが増えることがいいとも思っていないんです。移住者で小学校が存続しているから石徹白を出た人たちが、帰って来ようと考えてくださればうれしいですね。お互いに支えあえばいいなと思います。

また、移住者も神社やお寺の行事に積極的に関わっています。お互いの力が合わさっていくことは大事だなと思います。

●石徹白は、地域の方と移住者の方とが、いいバランスで暮らしているようにみえますね。

平野さん 移住して、「新しくやってやろう」、ではなくて、住まわせてもらって、教えてもらって、そこから新しいものを生み出していく。そのスタンスが大事だと思います。

石徹白に移住される方は、地域への尊敬を抱いて来ているし、地域の人たちもお互いに認め合う心持ちでいてくださるので、大きな問題がなく共生できていると思います。

●そういったお互いの心で石徹白は今、あるんですね。さて、石徹白に移住され10年、平野さんご自身、変わられたところはありますか。

平野さん 例えば都会に住んでいるときは、雨が降ると「濡れちゃう、嫌だなあ」って思っていました。しかし、この集落の人たちは、お日様が照っていれば「ありがたい」、雨が降っても「ありがたい」と言って、どんな時にも恵みに感謝します。そんな姿に本当の豊かさを感じるようになりました。

●最後に、今後やっていきたいことはありますか。

平野さん 石徹白の暮らしを受け継ぎ、次の世代に伝えていきたいと思っています。冬が長いので伝統的な保存食も豊かです。美味しいんですよ。もっと教えてもらって伝えていきたいですね。

それとともに、このような自然の中で人との絆を大切に暮らしてきた地域の人の精神も学ばせてもらっているので、それを子どもたちにも伝えていきたい。そんな媒体になりたいです。

※石徹白洋品店は、2021年度「第12回地域再生大賞」の「地域再生準大賞」を受賞されました。
平野さん並びに石徹白洋品店の皆さま、おめでとうございます。



堅田の街に
1万人が集まった
「堅田湖族フェスタ」

「株式会社空兵衛造船所」

150年前から琵琶湖とともに

大津市本堅田にある株式会社空兵衛造船所は、県内で唯一ドライドック、船の定期整備ができる造船所です。創業は明治5年、琵琶湖で使用される漁船・運搬船はもちろん、観光船や滋賀県の水質調査船や警備艇、巡視船、また県内の小学5年生を対象にした学習船「うみのこ」も、建造や定期検査を空兵衛造船所で行っています。

一見私たちの生活とつながりがないようにみえますが、びわ湖大花火大会の打ち上げ場所の設営なども空兵衛造船所が関わっており、実はとても身近な事業所さんとも言えます。

最近では、地元の親子を対象に造船所所有の船で「船上子ども食堂」を開催。コロナ禍で窮屈な思いをしている子どもたちに大変好評だったそうです。この船上子ども食堂の開催にあたっては、単に子どもへの食事の提供だけではなく、子ども、親同士のコミュニケーション、加えて地域のコミュニケーションの場になってほしいという想いと、もっと琵琶湖を身近に感じ、自然や環境に、ひいては滋賀県に興味を持ってもらえればという想いもあったそうです。滋賀に住んでいても「船に乗ること」は、かなり特別なこと。もっと湖上に出て琵琶湖や自然を感じることが大切ではないかと、お話を聞きながら思いました。

今、社長の仲野薫さんは、地元の堅田内湖を「憩いの

場」に復活させようとボランティア活動にも力を入れておられます。甲子園球場約2個分の広さを持ち、昔は真珠の養殖が盛んだった内湖は、養殖業の衰退と同時に、使われていた棚や杭などが放置状態になっていました。この光景を何とかしようと仲野さんが声をかけ、地元の人たちと「堅田21世紀の会」を立ち上げ、棚などの撤去作業と清掃活動を中心に活動をされています。

昨年の秋には、もっと多くの人たちに内湖のことを知ってもらおうとイベントを開催。なんと堅田の街に1万人の人が集まったそうです。

このように湖上から、地域から、点を結んで線にするかのように滋賀、琵琶湖と私たちをつなぐ空兵衛造船所。地元で150年の歴史を護りつつチャレンジを続けています。



船上子ども食堂の様子

- 代表 / 仲野 薫 ●設立 / 明治5年
- 連絡先 / 滋賀県大津市今堅田1丁目2-20
TEL:077-572-2101
<http://www.mokubezosen.jp/>

Ohmi Essay

企業の社会貢献活動 わたしたちのサポ活!

地域に貢献できる会社でありたい

平成16年、当社が創立50周年を迎えた年に「長年お世話になった地域に恩返しをする活動を何かできないか!」という社員の発案で、びわこ地球市民の森で開催した植樹が当社のCSR活動の始まりでした。「二酸化炭素を排出する自動車を扱っている会社として環境のためになにができるか考えよう」。これが植樹を始めた理由のひとつです。社員や家族、そして当社のお客さまにも参加いただき多き時には500名以上で活動を行いました。平成20年からは植樹をした木々を守るための育樹活動として夏に草刈りも始めました。平成26年からは琵琶湖岸のヨシ植えも行っています。また、平成21年からは防犯パトロール活動も行っています。

県下全域に店舗展開している組織力を生かし、地域住民の皆様様に安心感と防犯意識を高めていただくよう取り組んでいます。その他、学校支援メニューでの「滋賀掃除に学ぶ会」、福祉車輛体験学習、マルシェ開催など様々な活動で今後、何十年も続けられるような社会貢献を全社員で取り組みます。



滋賀ダイハツ販売株式会社

北川伸朗さん

Ohmi Essay

多文化共生

大きな社会問題を
小さな町で支える続ける

滋賀県の東部に位置する愛荘町は、人口21,000人ほどに対して、外国人の占める比率が県内で2番目に高い町。このような中、外国人住民が地域の人たちとコミュニケーションがとれるように、交流の場の設定や様々な支援を行っているのが愛荘町国際交流協会です。事務局長の川井健司さんにお話をうかがいました。

人口の外国人比率の高さには様々な要因があるようですが、1990年の入管法改正により日系の人たちが家族とともに入国できるようになり、愛荘町内や近郊の工場で沢山の日系人が雇用されたことが一番の要因とのこと。また町内にはサンタナ学園というブラジル人学校があり、その学校と校長先生を頼ってくる日系ブラジル人の家庭もあるそうです。

このような背景から、町内小・中学校に通う外国籍児童とブラジル人学校に通う児童のための学習支援教室や日本語教室が協会の大きな活動となっています。

素朴な疑問として、「日本で生まれ育っている外国籍児童であれば日本語は話せるのでは」とお聞きすると、「日本の教育機関等に通っていない外国籍児童は日本で生まれ育っていても日本語を話すことはできず、日本の学校に通っていても親御さんが日本語を話せないと会話はできても勉強に支障をきたすケースが多々見受けられる」ようで、特に日本の教育機関に属せない児童は、母国のことも日本の社会の仕組みもわからずに育つケースがあるようです。こうした子どもたちが未来を諦めてしまわないように協会の支援は続きます。

また、協会では日本人と外国人が対等にコミュニケーションを図る事業も心掛けておられ、事業外で友人関係へと進むケースもあり、川井さんは「協会の手を離れたところでも交流関係が生まれてうれしいです」と笑顔で話してくださいました。

複雑な問題や課題を抱える外国人の子どもたちにとって、愛荘町国際交流協会は日本の親のような存在かもしれません。

2021年度「ナカザワNEOフレンドシップ基金」採択団体

愛荘町国際交流協会

●事務局長/川井健司 ●設立/2015年 ●<https://aishoifa.localinfo.jp/>

学習支援

不登校も選択のひとつ、
と言える社会へ

2021年3月に滋賀大学教育学部を卒業した3人が立ち上げた「Since (シンス)」は、不登校の子どもたちや生きづらさを感じる子どもたちを支援する団体です。今回は立ち上げたメンバーの麻生知宏さん、生鷹幹太さんのお二人にお話をうかがいました。

Sinceの活動は、遊びを中心に、子ども自身のありのままを受け入れる居場所「フリースペースSince」と、様々な形の学びをサポートする「フリースクールSince」、そして一対一で関わり、支援をしていく「ステップ・ブラザーSince」の3つが柱です。

在学中の2020年に設立。卒業後、本格的な活動を行うのはコロナ禍により厳しいものの、他の団体と連携しながら活動を広げています。特に、コロナ禍では学校へ行くことが辛い子どもや、居場所がない子どもたちが一層浮き彫りとなり、Sinceは大きな支えとなっているようです。

そんな子どもたちの変化をうかがうと、「お母さんと離れるのが不安だった子どもが一人で来てくれるようになった」、「ずっとフードを被っていたのに、いつの間にかフードを被らずに来てくれる」とうれしそうに話すお二人。また「親御さんも子どもの変化に驚き、喜んでくださっています」と話してくださいました。

このお二人と、メンバーのもう一人、門脇真斗さんを含めた3人は、不登校や学校の息苦しさなどを経験してきた仲間。その実体験は、「教育をめざす大きなきっかけ」になったそうです。しかし、子どもたちには「わかっている気にならないように気を付けています」と、この心遣いに経験者ならではの思いやりを感じました。

Sinceがめざすところは、「フリースクールが当たり前に選択できる社会」とのこと。そのためにも「学校に行っている子、行っていない子、ともにフラットにみてほしいですね」とも。社会の一員として、そんな眼差しを忘れずに子どもたちを見守れる存在でありたい、と感じた取材でした。

Since (シンス)

●代表/麻生知宏 生鷹幹太 門脇真斗 ●設立/2020年
●<https://since-2020.jimdofree.com/>

がん患者・家族支援

まちなかの、心に寄り添う がん相談室



認定NPO法人「淡海かいつぶりセンター」は、がん患者さんとそのご家族が「自分らしく、よりよく生きる」ために、心に寄り添ったケアと情報提供をされている団体です。

うかがった日は、がん性疼痛看護認定看護師さんを講師に、ミニセミナーを開催されており、一緒に参加させていただきました。話が進むにつれ、参加者の患者さんやご家族の方がポツリ、ポツリと心情を口にし、硬かった表情が柔らかくなっていく姿に「誰かに話す」という行為は、心の負担を軽くしていくのだと、目の前の光景を見て実感しました。

医療側は当たり前のことでも患者さん、ご家族にとっては初めての事ばかりです。不安が募るなか、精神的にもいっぱい、いっぱいになってしまう。そんな時は「気持ちを吐き出すことが大事です」とセンター長の宮本美佐江さんはおっしゃいます。一方で、配偶者や家族だからこそ、本音を話すことが難しいのも事実。「だからこういった場が必要なんです」と続けて話してくださいました。

淡海かいつぶりセンターの設立は2015年。当時はがんに特化して相談できる所がなく、英国ロンドンのがん相談支援センター、「マザーズ・キャンサー・ケアリングセンター」をモデルに設立されました。相談業務が中心ですが、情報提供はもちろん、専門家へつなぐための支援、お花見や紅葉狩りなどのレクリエーションにウォーキング、絵手紙や簡単なモチーフを描くワークショップなど実に多彩に活動されています。また、薬の副作用で脱毛期をむかえられた患者さんに手作りのタオル帽子を渡されるボランティア団体さんも一緒に活動され、センターにはいつも笑い声があふれています。

様々な立場から、がんと向き合う人たちが集う「淡海かいつぶりセンター」。そこは、ともに泣き、笑いながら、いつも傍にいてくれる心強くも温かい友のような場所でした。

認定NPO法人 淡海かいつぶりセンター

- センター長／宮本美佐江 ●設立／2015年
- 連絡先／大津市黒津2丁目17-32 077-546-6550
- <http://kaitsuburi.com/>

Challenger



故郷・米原市 中山道柏原宿の 地域プロデュースやっています!

高校卒業後、故郷を離れて年数が経つにつれ、故郷の衰退が気になりだし、何かできないかぼんやり考えていました。そんな時に「地域プロデューサー」という響きに何か惹かれるものを感じて、12年前、おうみ未来塾に入りました。そこでは様々な学びや出会いがあり、そこでしか得られない貴重な体験がたくさんありました。

その7年後、一級建築士事務所としての独立を機に、地域プロデューサーになろうと決意しました。すると、ちょうどその頃、「柏原宿活性化検討委員会」が米原市主導で結成され、その委員として呼びがかりました。その後、住民主導の実行委員会へと移行し、その中の「魅力創出部会」の長として活動することになりました。

そこで、まずは、今ある店舗やものづくりをされている方々をもっと地域住民に知ってもらうこと、横のつながりを作ることを、そして新しい価値を創ることを目的として、マルシェ「柏原やいと市」を年3回ペースで開催することにしました。また、「柏原あきないマップ」を制作したり、地元特産品の新たなプロデュースにも着手しています。

今年からは農家体験と古民家での宿泊をセットにしたグリーンツーリズムにも着手します。

将来は、地元だけでなく、全国各地の地域プロデュースも手掛けたいです!

おうみ未来塾 第11期生

山本 泰裕さん

- ・ji-mo design (ジモデザイン) 代表
- ・柏原宿活性化委実行委員会 魅力創出部会部会長
- ・(一社) 湖東三山自然文化連携ネットワーク理事



イベント 2021年度未来ファンドおうみ助成事業成果発表会を開催します。

【日時】2022年5月14日(土) 13:00~16:00(予定)
【会場】滋賀県立県民交流センター 207会議室(ピアザ淡海2階)

■びわこ市民活動応援基金A

団体名	事業名
番場の歴史を知り明日を考える会	近江古代史文庫創設事業
ぼてじゃこトラスト	滋賀の魚つかみ文化を次世代につなぐ、楽しく遊び、学び親子自然体験教室
特定非営利活動法人 やんちゃ寺	中高生の居場所・無料食堂における青少年健全育成事業
甲賀文化輝き	「それいけ!輝き忍術学園」動画配信・ミュージカル事業

■びわこ市民活動応援基金C

団体名	事業名
みんなの家EH	買物困難者のための24H無人ミニミニショップ運営(非営利)

■びわ湖の日基金

団体名	事業名
特定非営利活動法人 甲賀の環境・里山元気会	里山の自然の中で体験学習を楽しもう(来て見て作って自然教室)
いしみち里山保全グループ	石道100年の山林保全整備事業
認定NPO法人びわこ豊穡の郷	水辺で遊び癒され楽しみのある川づくりで文化と医療を環境で繋ぐ

■積水化成品基金

団体名	事業名
特定非営利活動法人 環境と農業の融合を考える会 鹿深の杜	地域(里山)環境整備と環境学習の場の提供II

■笑顔あふれるコープしが基金

団体名	事業名
大丈夫をみつつけよう	自分はこれで良いんだと感じられる大丈夫食堂
人形劇団あつぷりけ	手作りの温かさとお話を残るお話を伝承して行きたい

■ナカザワNEOフレンドシップ基金

団体名	事業名
愛荘町国際交流協会	遊びはボーダーレス!「たのしい」で繋がる多文化共生プログラム

■げんさん食育NPO基金

団体名	事業名
特定非営利活動法人あめんど	僕らが主役の課外授業 イチゴー会
社会福祉法人 美輪湖の家	安心安全な材料で本格的な「ケーキ」を利用者の自主協同の下生産

■湖国文学活動応援むらさき基金

団体名	事業名
くさつやぐら地蔵文化研究会	「地域の魅力再発見」地域に生き、かつ残る民俗文化の魅力を冊子制作し地域づくりに活用
しなやかシニアの会	平家物語研究会
特定非営利活動法人 高島藤樹会	近江聖人「中江藤樹」の思想の、音声付き紙芝居による教育現場等での啓発事業

■びわ湖源流の木遣い応援もえぎ基金②

団体名	事業名
東近江市あらゆる場面で木を使う推進協議会	100年の森づくりビジョン 東近江市・あらゆる場面で木を使うプロジェクト

講座 「社会的インパクト評価」セミナー開催のお知らせ

いろいろな社会課題を抱える不確かな時代。「インパクト的志向」が求められています。今回、事例を交え参加者の皆さまと議論できる場として開催します。

【開催日時】2022年3月16日(水) 13:30~16:00

【開催方法】オンライン(Zoom)

【講師】インパクト・マネジメント・ラボ 鎌田 淳 さん

【参加費】無料

お知らせ 2022年10月1日、労働者協同組合法が施行されます。

これに先立ち、淡海ネットワークセンターでは、2022年6月頃に「労働者協同組合法」についての説明会を開催します。詳細は、当センターのホームページやメルマガ、SNS、チラシ等でお知らせします。多くの方の、ご参加をお待ちしています。

編集後記

■2回にわたってお届けした「移住」。非常に個人的なことですが実兄は「ソフトな移住」を、そして友人も最近、ある離島に移住「定住」しましたが他人事でした。しかし、今回の取材で一気に「ソフトな移住」を考えている自分があります。とは言え、大きな決断が必要。どこで覚悟するか…原稿を書きながら深く考えた日々でした(現在進行中…)。さて、今号を飾ってくださった取材先の皆さま、寄稿くださった皆さま、本当にありがとうございました!皆さまの熱い想い、活動を少しでもお届けできたでしょうか。おうみネットの果たす役割ってなんだろう、と問いかけつつ来年度も皆さまの想いをお届けしていきます! (辻ゆかり)



Ohmi Network Center
淡海ネットワークセンター
公益財団法人 淡海文化振興財団



淡海ネットワークセンターは、県内の市民活動、NPOをサポート・ネットワークしています。

■情報交流誌「おうみネット」は登録している県内外の団体・個人のほか、次のところに配布しています。(50音順) 関西みらい銀行、京都信用金庫、県内公民館、県内公立施設、県内市民活動支援センター、県内社会福祉協議会、県内市役所・役場、県内図書館、県内中学校・高校・大学、滋賀県信用組合、滋賀県庁、生活協同組合コープしが、他

発行日 / 2022年3月1日 発行所 / 公益財団法人 淡海文化振興財団
〒520-0801 大津市におの浜1-1-20 ピアザ淡海2階
TEL:077-524-8440 FAX:077-524-8442
https://www.ohmi-net.com E-mail: office@ohmi-net.com
開館日: 市民活動ふらっとルーム / 火~土曜日(火~金曜日の祝日は休館)
事務所 / 火~日曜日

淡海ネットワークセンターのHPは右記QRコードでご覧いただけます。セミナーや助成金、イベント情報も掲載しておりますのでぜひご利用ください。



公益財団法人 関西みらい銀行緑と水の基金

滋賀県内において、緑化推進や水環境保全に取り組まれている自治会や住民グループなど地域団体の皆様の活動に対し、助成申請をいただいた事業の書類審査を行い、最大30万円までの助成を行います。

〒520-0043 滋賀県大津市中央四丁目5番12号(TEL:077-521-1545)

ホームページ <https://www.gw-kikin.or.jp/>



この印刷物は大豆油インキを包含した植物油インキを使用しています。